

【講演会報告】

Sidney Cheung 氏講演会

(2005年度第1回日本文化人類学会北海道地区研究懇談会, 北海道民族学会 共催)

桑山敬己

開催日: 2005年7月2日

開催場所: 北海道大学

演題: 「人類学者と環境保護」

講師: Sidney C. H. Cheung (香港中文大学人類学部 准教授)

昨年度に引き続き、日本文化人類学会北海道地区は、研究懇談会を北海道民族学会との共催で行なった。第1回研究懇談会の概略は以上の通りである。

講師の Sidney C. H. Cheung 氏は、大阪大学で博士号を取得した日本通である。当日の発表は堪能な日本語でお願いした。参加者は約30人ほどであった。

講演で取り上げられたのは、香港・新界地区の北西に位置する Mai Po (マイポ) という湿地である。マイポは Inner Deep Bay (IDB) と呼ばれる地域の一部で、多種多様な渡り鳥が飛来することで国際的に知られている。今日、マイポが香港政府や企業によって注目されているのは、それが観光、特にエコツーリズムの資源として活用できるからである。観光の経済効果に目をつけた香港政府は、自然を売り物としたキャンペーンを幾度となく展開したが、マイポ以上の可能性を持つ場所はないといわれる。

だが、近年では住宅建設のために土地がつぶされ、マイポ周辺でも環境破壊が進んでいる。特に問題なのは、IDB で伝統的に行なわれている魚の養殖が、土地を求めるディベロッパーによって脅かされているという事実である。魚の減少は渡り鳥の飛来に大きな影響を与えるだけに、問題は深刻である。ただ、これには養殖業者の高齢化と後継者不足も関係しており、解決策は簡単に見つかりそうにない。そこで、香港政府はマイポに大規模な湿地公園を作るなどして、環境保護に乗り出した。

以上のような事実に鑑み、Cheung 氏は次のように結論づけた。第1に、IDP の自然保護対策を講じる際には、地域の社会的歴史的発展を総合的に理解する必要がある。第2に、長期的展望を持って、魚の養殖の維持発展を考える必要がある。そして第3に、自然環境を守るためには、湿地を訪れる観光客の数を限定する必要がある。

一見何気ない結論だが、Cheung 氏の研究を理解するためには、次の2点を押さえておかなければならない。まず、香港では学問の社会的貢献が求められているので、人類学が現代問題の解決に有用であることを示す必要がある。次に、概して中国人は異文化研究より自文化研究に興味があるので、異質な他者より身近な自己を研究対象として取り上げないと、学生はおろか一般の関心を引きにくい。人類学の社会的活用が議論されている今日の日本で、Cheung 氏の研究はおおいに参考となるだろう。

なお、今回の発表は以下の文献にも基づいている。

Sidney C. H. Cheung “Keeping the Wetland Wet: How to Integrate Natural and Cultural Heritage Preservation.” *Museum International*, No. 223 (Volume 56, Number 3, 2004), pp. 29-37.

(くわやま・たかみ/北海道大学・日本文化人類学会理事)